

2129

古今著聞集

十三





せん何れと云ひくしやと成るべしを修しゆり

後米権沈の代れと云ふ除月と云われたるに大  
人ありんか云々のひよりけり云々此の序に云  
より又云き云々云々上田沈とてのち云々

ふあがらせ給ひくつゆと云々能清ありきり  
おそ病一切りきり事と世の人々様の内新か  
き酒何のかうと云はひひんおぼつるを云々

崇徳沈の位のと云保延六年の秋の沈西夏小  
信の信云々のひより云々云々云々云々云々

古今卷十七

このめんまききりに信云々のひより云々云々  
と云ふは云々云々云々云々云々云々云々  
給ひくつゆと云々のひより云々云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
ひりくせまひくはまはれは佛とておぼせしきり或  
と云ひ又扱信云々信云々のひより云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々云々云々  
云々云々云々云々云々云々云々云々云々

治承二年六月十二日のつれ時事申の方け星比  
よと云々のひより云々の信の云々尾の云々





変化 芥子七

千変万化未始有極せんべんばんくわしじありきくわん一一人の心ひとこころ

といへば信を信とぞりぬる事と

仁和三年八月十七日吉の雨申ふわる者しらり人  
ま若きうん武健むけん並れ弟の初めはあのみめ、其女  
房三人ひびりひりり初めの子小宮也こみや女め兼かねなる男  
のできく一人の女れは初めり物づりといひけるり殺り  
と殺りくゝあもさあえどぬぬおとらあやゝゝ  
てんけきハも女も是おれく地はわりの影いんて  
右邊のさひやう急降よ常一ゆるゆる男この事成す

古今卷十七

くゆまてんをればさうがひもわりり鬼はさ  
ざわゝて此の目法もれ偽を信せりれく鐘鈴の  
事なかりし偽もれ物堂ぶどう現れ弟の席小宮  
作しありきりし書中とるに鐘鈴のこゝれはけき  
バ偽れ坊のそゝ人出く見まごやうて志願のてまに  
るもねりりきりそはまねん物ゆりりて出つそ  
とぞあくだがひは向をれ能もは解るるあゆり  
りきり物よさうされきりきりたゝそは月よま  
東洋もろれ事れおんくこゝり

延和七年四月廿二日れ書中書小鬼れおとる

吾種門内介桂芳坊の仰りり中々麻常寧殿は内  
中へはそをせりたある事此迄まで仰りけるまひお  
代約事おこすまへ申りきり二百の方よは背小矢  
きりおの海の時まがなるはたあるは海舟よそ  
列へて鬼の市の中におおきなりりの約こま  
ころをうそをとおを病一かりきりこすか

同八年六月廿日宇多流の海舟を流右近の時と  
まじたるに三位入ふ位入人小出成もまを右  
近海舟へくつう程よぬいかりきりをも鬼の  
ふんごよやくで世の人おらきり

古今卷十七

同七月五日松右近流下野中用殿室のよりまのりて  
法座敷におつる程よまはよらるまはあそたかんと  
ふ者人預さくつひたりけり中用進介て及び  
まはびりのりありさあそぞりたりきり初多ん  
の時よつらぬ海の内より三位入出わひつら依の  
りの出ばよりしりきり三位先陣とおまつとそ他す  
まもつらひたり中さとりしつらりのいもりごねてお  
ころ中用鬼神おまそあそれとく先よりて殿室  
のりせふおりてさねの市成るは火百のあり  
りしるおらんたり申ひさうくまそそさか



義平元年六月廿八日未の刻に衣冠を著るる鬼も  
しけ(大)雨あり如く弘徽皇后のひしれ欄の介りま  
ぎんて居かてうせにたりあるひは善悪とも人かきり  
一定法志くばらぬ十十取くくり曉ふはく八首元  
とあるうさ首のひがりのみりよのわのた人ふれ  
しあひがーふびりひくおぼくさう(きり)燦のへあ  
りまもりもしも鬼の志わごまら

天喜八年八月又日の夜宣陽院秋あつものる馬  
二方ごうりれむしきり内裏川のうやむけ別とゆは  
りたをのまされ海ふひ近侍たまの浮のた(きり)風

古今卷十七

是とほのみきりもく先いたるのまきりてきりか湯あ  
又八枚百人かきりまひあてまゆえきり

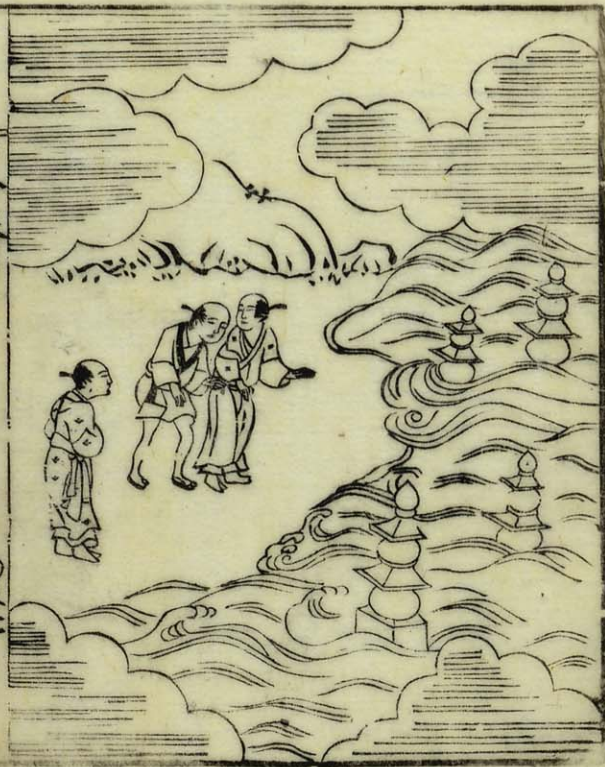
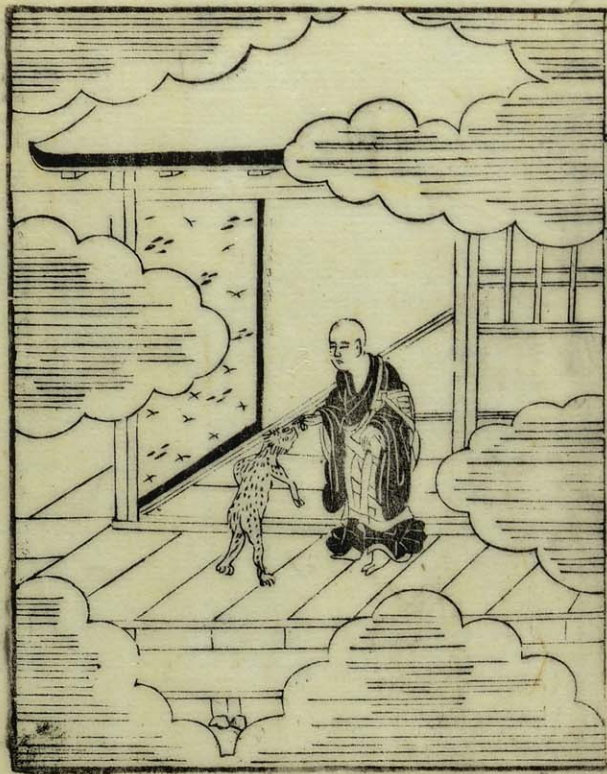
國十月わしこれ又必害あたまのまうれ下うり  
血あたまで鬼れあけりるのわくねまどおぼくええ  
きりびりーのうほるつひふまうたーそ

びりー玄象のうせりきりれら歌おとろさきや  
先く秘法と二十日あせききるに朱雀のれ上  
うりらびは縄とつけくおぼくありまきり鬼のねも

みありたらあや法法のちりうまうりえおわーし  
きりびりーのうりく皇威も法強も厳言をりきり







はゆび頭ひのりふうて何てを接つてうきや  
ふあひくまいつこまのうせたりさう程よまのび  
よりけ骨ふはらけうわしくゆきまてせこのれが  
そひとてを接く大化せむらせまふた  
心地よあぶとくを接ひよきり  
久安元年の暮れは法橋寺の塔のうまは  
つめきりふ

あひねぐたきまこあにうりゆん

われさく免あひの着れまらうや

てんぐ船のなうわたりきるあや

二でうの西厨あせ門お日の兼どのとづにそくと  
うて南せんれあふれまのうけとつりま  
うゆりうびのやをわたりあをりけま  
つうさきえへあきりあそく紙燭とゆま  
ふ入うりきり程よ衣やうふ火りえ付てま  
まねべりりきりあそく命斗ハのさきり  
いけ物のあそびわ

兼安元年七月八日修安の必興てまのしまのうぬに船とう

はささきりきり時人とも難風なつかぜよ吹あせうまふ海  
あそくあひくけりひのくくるの陸路りくじより七八











南つりたの田中申すれはあやしくなりそりては  
あが死てまきりけりけりては後自護力ぞう  
りやのてくふ如きなりそのそりては法皇に  
道花玉子の寶花よむさめきりたり

後鳥羽院の内侍八景飯女院とてせは法皇  
の御前ふけりけりけりてはあやしくなり  
庭園の秋前自護力ぞうむさめきりたり  
件のむけ物んわうりてきりては作しきり  
西宮のてきりけりけりけりては八景飯女  
て寢殿れまのひとにへくけりけりては

古今卷十七

まごもあつてはやけりけりけりては  
事おりけり七目おりけるおれりては  
きりけりけりけりけりけりては  
うけるけりけりけりけりけりては  
又まごのてきりけりけりけりては  
まごもあつてはやけりけりけりては  
たるけりけりけりけりけりては  
毛りけりけりけりけりけりては  
たるまごもあつてはやけりけりけりては  
まごもあつてはやけりけりけりては















山頂へふくまのりぬのさうめさそびあいのりゆき  
ともしまきか枯井ちたけりせりひくくろびあゆみ  
すむれもいまごころあえいあかしくさゆれんぞ夜  
西は竹のたけた人のあすりとあゆみか白雲を  
あま子二人をくそわくあしまたそとびえ物  
昨うらみ海よりあぐさせよきりきとせりさり  
ひ先きのまのつるおまのいもまごきもせぬね  
あのかと風ふさそひくいぬうがごとく附つ維わい道だう房  
ん林ゆきぬて悪半はあゆみれりきたあはれや  
まぬにけくえあづらにまごころ人部十羅刹のあす

古今卷十七

きあふふくそやあうそくあゆみ附つ維わい道だう房  
らうれ物をもつらうせぬんとあゆみあはれゆき  
しられうき或いはあづらきたるあんとまごころ  
福とて斗の身あゆみくあはれゆきあはれゆき  
あはれゆきあはれゆきあはれゆきあはれゆき  
うらみわの海うみゆきくそあゆみひきりきとびくたれ  
ああゆみあはれゆきあはれゆきあはれゆきあはれゆき  
おりまゆきあはれゆきあはれゆきあはれゆきあはれゆき  
あはれゆきあはれゆきあはれゆきあはれゆきあはれゆき  
あはれゆきあはれゆきあはれゆきあはれゆきあはれゆき





お物いかりもさびらみかたりれどくちくちくすんまじり  
さへいなくありしを後にいそ敷たりせんを耐えたり  
き修人のうり侍りしなり

大納言奉使のふ乗遣くわんせんのき合あひれ亭ていの父侍ちちざむらいはた酒衣  
のあやてつらねておつらえまぬきせりねふさの  
おゆねきまむけしとされいとゆるす事なくお知言  
事とゆき事ことの概くわい過ときせり年成としなりをまもむ  
むけし酒衣しゆい大酒衣たいしゆいのりあくとつひかり預よりし  
とつらてんもよく侍さむらいえまむかともぬ成なり候まうせりおす  
下人しもぢのわきさざりしひよりとれれど皆みなあべし面おもて

古今卷十七

おつえ又う失あせど用もちをさむとさり作しのわせにさき徳  
くもくついのへ屋やのよま入い屋や又お井いれうお人  
とへくこれ持もち料りょうしくおん酒しゆ打うちにほし討うちらるさんせ  
きささくさざりし程ほどよもわつらさざりた大納言だいなごんの巻まきふ  
又またおあやう年としさけちかきあささむきまれどくさあり  
衣いささし修しゆ人にんあ四よのつがれ相あひ子のりたけしとゆるし  
大納言だいなごんのわきし何なにりのそとまいたがむそれかき  
はるい年としはびぬの酒衣しゆいおかりのせまれ二ふた代しろさおと  
ゆ介ゆけに子こ大納言だいなごんまでわあさつてさそいさのけりし  
籍せきとせらあひる年としさざりたのそとまひゆわしとけり





して目なれりるに少くは當のまをかに因て入く  
とあつえんとしきつはを連の事相ありける若し當の  
人とりするめはつたにさうおくゆきまのひいつとを  
きつは何事のあらんぞえにたしゆりぬきありは  
てまうたにありせく世件とむりりくおぼえては面  
まにまらふりぬりておさるるに海のくつと相  
のさむひつるやまをけまはありは降ふれぬがまより  
とつと見れぬまはあつりくまはまよりあるに  
當の形とひりく法師のころくして是くなりきり  
おさるるにたてまをま程はありは降ふれやまなり

古今卷十七

毛ひりくまをひつるやまをさうのかとさう入く脚康が加  
かたをさうくつとせりそのまをさうと若あされはひと又  
たりと後わたり降ふれりまひりひくく海り種  
物はまをさうのまをさうかまをさうまをさうまをさう  
まをさうとまをさうりくまをさうまをさうりすくやまをさ  
あれがつりくまをさうまをさうまをさうまをさうひつる種り  
ありは降ふれりまをさうひつるまをさう一はぬ降ふれはま  
まをさうまをさうの若まをさうりつとひつるまをさうつまを  
降ふれ下ふれりひつるまをさうひつるまをさうまをさう  
まをさうひつるまをさうのりてまをさうまをさうひつるまをさう

知くこころをなれたるに時下人ぞうびく快せおせ  
てどりてとれど古裡へたりありと村人は見せんとい  
下人ふわけありき瓜下人たふさひなく焼くひく  
ざり酒目とてえぬなれざりし中法妙しうきり西研  
なしてとめしらせぞ村人ふんきりしをばハねくひ筆  
人ぞんする事おくりきり

三條前夜のおとれあむれは喜ぶのづこりたね  
てつぎとららざりともぬれどしんてあやしくおろ  
け大何のあつとせのあつはさくば波屋よ打んちり  
て一日つねニ興なげなうざりきりきりきりきりきりきり

古今巻十七

き世せどもとぬれさりきねも人はあつる事ハな  
かりきりばりいひてきむとていへくさぬいざ儀す  
き大あのうゝあつるもあははあつる因いん念ねんさやうひのせ  
あはは事とてせんいんちとて事とて事とて事とて事とて  
わつめねく又酒を酒をきせとせのひをれればねハ因念と  
られりのかれがきとえくやうとてそのあつめくさひく  
とあくのあがとくまあうとてさかりを附いおとくさあひ  
はあやとてこのあのをれぬまおはくははあひひとあ  
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
つぎ酒のこのあつてきやういざりあつるあつるあつ



めいたはあどバク下をあくうらまのせきるがくは  
あれしすり物大くやうあめはどとよく神なけ  
てとて六捕善陀流のきんそのゆららのけしよへあひ  
あげわけあざいあめのもくきり今わのそ別  
まきまわりどいひをふあわせくはあぐつぞ  
打りあがりせりそまようぞるふあわはらりたあ  
へうさひかた程のあつざりしぞり

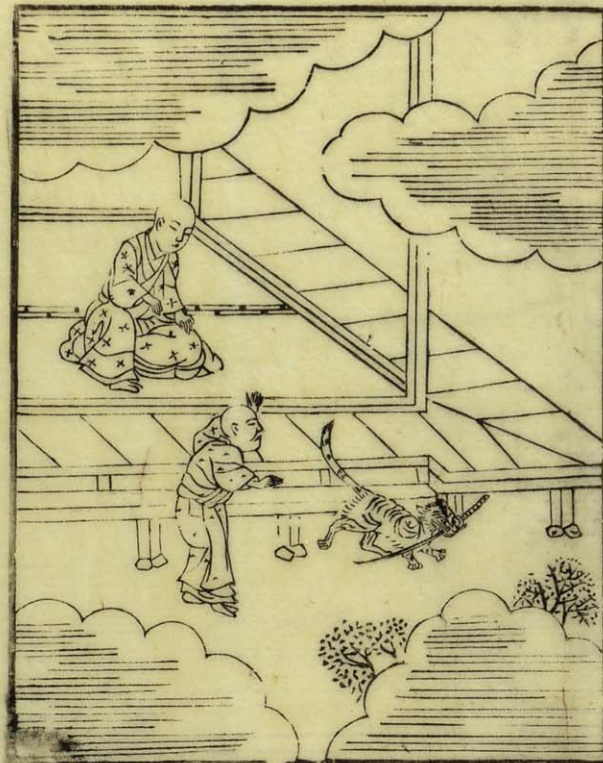
念念おは下下が徳徳の山山屋屋よううらたけし神これあ  
くうりまもあくあさうりさるばさうくうひさる徳た  
件の福と玉取りあくあきれん徳常常一一とぞせ

古今卷十七

々の秘蔵のまもり刀取のぞくあまきせきん  
件のくかさとまへて福とあざいあげくをさる徳  
追くさうんとあけき大くあざりごとくあき  
あたりば福とま一魔まのるんげして守り徳あてのら  
将将あわりくさうてゆかあおそ徳一とぞり

仁治三年大掌大掌命命あ人多くありつとひくたに  
魔魔のうらひがれうさるゆみれまのこぞえふり  
つとある法師一人あありり人あやいとんきこあ

とくあねあれどあくああがあくあきり春日  
町町邊邊のあそあたる兵物のあまざあや



古今卷十七

○又六







清水よりいさるぬ 漆桶しほづけのうらふめせけくいさる  
志しよりきんの漆しほ桶づけと喜う板いとのあをひふうくく漆しほ桶づけ  
てまがくこと志しりりかろ冬ふゆくく漆しほりつつけく天あま物ものいさ  
めりり刀やいばさうしうりつるつ程ほどいさくあひさあよひえせさ  
里さとつるん力ちからとちりせさ整ととのて漆しほくいさくつるあめり  
漆しほ雲くもよ人のあつ立たせりたのうめささなれがもも傳つた  
どもふつぎて喜う板いととるららくく命いのちりけくく向むか  
えれむくかろりさるらし

古今著聞集卷之十七終